

あたしの

あねの  
古鷹が

可愛すぎて

しょうがない!

黒ねこ作 (illus) カロ



KAKO・FURUTAKA  
KANTAI COLLECTION FANBOOK

KANTAI COLLECTION FANBOOK

あたしの<sup>あ</sup>古<sup>ね</sup>鷹が可愛すぎてしょうがない！

黒ねこ作  
表紙・挿絵/カロ

# Contents

- プロローグ ……007
- 第一章  
あたしの古鷹が寝取られたっ!? ……012
- 第二章  
艦娘記者の青葉はかく語りき ……034
- 第三章  
天龍ちゃんのお悩み相談室 ……064
- 第四章  
衣笠さんにお任せプラン ……088
- 第五章  
古鷹の寝顔が尊い件について ……112
- 第六章  
あたしの古鷹が可愛すぎてしょうがない! ……132
- エピローグ ……154
- あとがき ……160

# The Characters

## **加古** 古鷹型二番艦 重巡（改二）

第六戦隊の旗艦補佐。三度の飯より、古鷹と昼寝を愛する重巡艦娘。同期着任の青葉とは悪友でもある。

ちょっとした勘違いで古鷹が提督と付き合っていると思ひ込んで（心が）大破する本作の主役。

## **古鷹** 古鷹型一番艦 重巡（改二）

第六戦隊の秘書艦。加古を溺愛する姉で、加古のためなら時間や労力を惜しまない心優しき重巡艦娘。

大天使との呼び名も高い健気な乙女。可愛い。

## **青葉** 青葉型一番艦 重巡（改）

第六戦隊の旗艦。三度の飯より、ゴシップを愛する敏腕艦娘記者（自称）。加古の同期で悪友でもある。

情報誌『月刊青葉』の執筆、編集、発行担当。

## **衣笠** 青葉型二番艦 重巡（改二）

第六戦隊の一員。青葉の妹らしからぬ良識を備えた第二の秘書艦。青葉にアタックを続けているものの、まるで気づいてもらえない恋愛の苦労人。

## **天龍 天龍型一番艦 輕巡（改二）**

第十八戦隊の旗艦。第六戦隊と組んだ経験を持ち、加古とは飲み友達。怖い物知らずだが、恋愛は超奥手で初心な乙女。

## **卯月 睦月型四番艦 駆逐艦（改）**

第三十駆逐隊の一員。語尾に「ぴょん」をつける駆逐艦で、居酒屋『鳳翔』のバイト店員。常連の加古とタメ口で話す仲。

## **日向 伊勢型二番艦 航空戦艦（改二）**

第四航空戦隊の旗艦。瑞雲愛によってズイウン教を創設した師匠。瑞雲商法を用いた胡散臭さ全開の布教活動をしている。

## **夕張 夕張型一番艦 輕巡（改）**

第八艦隊の一員。サブカルを愛し、各地のゲームセンターに出没する無敗王者。通称『アーケードゲーマーめろん』。

## **長門 長門型一番艦 戦艦（改二）**

佐世保鎮守府の重鎮。司令長官の秘書艦と第一戦隊の旗艦を兼任する。秘書艦の座を巡り、大和と張り合うビッグセブン。

## **神山宗之（カミヤマムネユキ） 帝國海軍少将（提督）**

第六戦隊の司令官。三十路前の独身男で、啜え煙草と無精髭がトレードマークの提督。仕事のできる優秀な残念イケメン。

あたしの古鷹が可愛すぎてしょうがない！（試読サンプル）

## プロローグ

「あー……古鷹。怪我はないか？」

「……はい。提督が抱き止めてくれたので……」

「お互い慣れてないからなあ。ま、こういう事故も起こるだろ」

「えっと、その……すみません」

「まだ謝るのは早いぞ？　これから何度もコケるからな」

「……提督？　わざとやってますね？」

「ふむ。じゃ、次は上手く押し倒すとするか」

「それはそれで困りますっ」

「冗談だ、冗談。加古に見られたら殺されかねんしな」

「もう。加古はそんなことしません」

「……いや。この状況は危ういと思うぞ？」

「そ、そう言われると……」

「しっかしまあ、塩澤長官の気まぐれも困ったもんだ。今年もバレンタインパーティー

をやると思っちゃいたが……まさか、ダンスパーティーに変更とはなあ」

「どうしてダンスなんでしょう？」

「俺の同期で來栖くるすってヤツが横須賀にいてな。アイツに聞いた限りじゃ横須賀の長官が言い始めたらしい。で、うちの長官も対抗したみたいだな」

「あの、それってつまり……」

「うちと横須賀の長官は根が深いからなあ。小耳に挟んだ話じゃ、兵学校時代から張り合ってるそうだ。まあ、それに付き合わされる側は堪ったもんじゃないが……」

「あ、あはは……」

「生憎、俺は今までダンスの経験なんぞ一度もない。だってのに、将官は全員参加しろときたもんだ。……ったく、大佐の松山を今ほど羨ましいと思った日はないぞ」

「……でも、私で本当に良いんですか？」

「お前じゃないと困るよ。古鷹」

「あ、ありがとうございます。古鷹嬉しいです……」

「秘書艦をダンスパートナーにしろと言われてるんだ。気負わなくていいぞ」

「私、頑張りますね。提督のパートナーとして」

「お前は真面目だなあ。こんなもんは適当に流しときやいいのに……」

あたしの古鷹が可愛すぎてしょうがない！（試読サンプル）

「ふふっ。そう言いながら練習するんですね？」

「俺にもメンツつてもんがある。お前にも恥を掻かせたくないからな」

「……提督。ありがとうございます」

「気にするな。そういや、レストランのディナー券が余ってたな。当日は付き合わせる礼に美味い夕飯を食わせてやろう。長官も絶賛する店だ。味は期待していいぞ」

「それなら、加古も一緒に……」

「一応、お偉いさんが来る行事だ。我慢してくれ」

「……わかりました」

「すまん。……ところで、古鷹。もう離れても大丈夫だぞ？」

「えっ？ あっ！ す、すみません……」

「いやいや。ご馳走さん」

「も、もう！ セクハラですよっ！」

「悪い悪い。今日はもう上がっていいぞ。いつもの飲み会だろ？」

「はい。提督も一緒にどうですか？」

「今夜中に読まなきゃならん作戦書があるからな。今回はパスだ」

「……古鷹もお手伝いしましょうか？」

あたしの古鷹が可愛すぎてしょうがない！（試読サンプル）

「なら、適当に軽食とコーヒーを頼む。それで十分だ」

「了解です。すぐお持ちしますね」

ガチャ。カッン——コロコロコロ。

「あれ？　今、ドアに何か当たって……あ、これかな？」

「とろろりなめらか♪　濃厚クリームプリン（定価357円）」

……えっと？　差し入れ、かな？

## 第一章 あたしの古鷹が寝取られたっ!?

「……はあ。とうとう明日かあ」

どこか浮かれた熱気を肌で感じつつ、あたしは溜息をついていた。

いつも昼時を過ぎたら閑散とする大食堂に、大勢の艦娘が詰めかけている。駆逐艦のちびっ子どもから、戦艦や空母の姐さん方まで。だいたい五、六十人ぐらいだろう。

佐世保鎮守府にいる艦娘の大半と言ったら大袈裟かもしれない。

でも、ここまで集まるイベントは一年でも数える程だった。クリスマスパーティー、忘年会に新年会、節分の豆まき——そして、バレンタインデーの準備だ。

明日、大切な相手に渡すチョコをやること。それが集まっている目的だった。

「……あれっ？ 加古じゃないですか？」

戸惑ったような声が傍で立ち止まった。木椅子の背もたれに預けた顔を左へ回せば、セーラー服に菖蒲色のショートパンツという活発そうな格好の重巡艦娘がいる。

「あゝ、青葉……って、なに？ どうして驚いてんの？」

いつも愉快な事件<sup>ネタ</sup>を求めて輝く翡翠色の目に困惑を滲ませ、ドーンピンクの癖っ毛を

掻く青葉型一番艦。彼女は、第六戦隊の仲間で、あたしの悪友だ。

「そりゃ驚きますよ。毎年、バレンタイン準備は不参加じゃないですか」

「さあ？ そうだっけ？」

「とぼけても無駄です。古鷹さんを見守るつもりで来たんでしょう？」

「べ、別にそういうわけじゃないよ？ ほら、非番で暇だったし！」

「……はいはい。そういうことにおきますね」

あれ？ えらい適当にスルーされたよ？

「青葉は？ 取材？」

「そうですよ。長門さんから許可が下りましたからね。今年は記録係の仕事をしながら、大手を振ってスキャンダ……いえ、ネタ探しができます！」

毎月、青葉の発行する『月刊青葉』は、鎮守府の様々な話題を網羅した雑誌として、あたしらの数少ない娯楽となっている。けど、面白ければ何でも掲載！ をモットーにしているせいか、イエローペーパーと紙一重なゴシップ満載の情報誌でもあった。

そういや取材許可を下ろさないからって、大食堂へ隠しカメラと盗聴器を仕掛けて、長門にめちやくちや怒られたのって去年だっけ？ 本当にブレないなあ……。

「さてさて、今月号の表紙は誰にしますかね〜」

配膳カウンターを見据えて、青葉は使い込んだ一眼レフのシャッターを切る。

三角巾とエプロンを着けた駆逐艦、古風な割烹着スタイルを貫く空母勢、パティシエみたいな本格派の大和型……格好は色々だけど、やる気満々なのは間違いない。

「なんてーか、みんなわりとマジだよね？」

「毎年ですよ。ほら、加古。古鷹さんとガサがいますよ」

集団の右後ろで、古鷹が衣笠と話している姿が見えた。

紺襟のセーラー服に桜色のエプロンという格好は、いつも寮の部屋で台所に立つ姿と変わらない。ただし、今日は付箋をびっしり貼ったレシピ本を胸元に抱いている。

衣笠も含めて気合い十分って感じた。あ、こっちに気づいた。

ちよっぴり驚いた様子で、古鷹が微かに唇を動かす。

『加古。来てたんだ？』

自然な笑みを浮かべて頷きながら、憂鬱な胸中で嘆息する。

古鷹は、日本の重巡洋艦の基礎モデルとして設計された艦娘<sup>へいき</sup>で、すべての重巡の姉と呼んでも差し支えない存在だ。そして、あたしの一番大切な姉でもある。

落ち着いた物腰は柔らかで、礼儀正しくとも堅物じゃない。着実な戦果を挙げつつ、秘書艦もそつなくこなし、ぐーたらな妹艦<sup>あたし</sup>の面倒も見るしっかり者のお姉さん。

これが、古鷹の人となり。でも、それだけじゃ足りない。

いつも作戦前は緊張で寝つけないとか、缶チューハイ一本で酔うほど下戸だとか、甘いものに目がないとか、本当は寂しがり屋だとか……あたしは大勢の知らない古鷹をちゃんと知っている。そんな些細なことが、あたしの中では誇らしく嬉しかった。

ただ、それも今日で終わり。明日、古鷹は提督と――。

ざわっ。食堂の雰囲気揺らいだ。

「お、長門さんが来ましたよ」

長い黒髪を揺らし、長門が颯爽とカウンター前へ歩いて来る。当然、彼女もエプロンを着ている。胸元に「P u k a P u k a」と書かれた絶妙なゆるさの黄色いやつ。

……司令長官のお手製つて噂もある出所不明の一着だよね、アレ。

「よし！ 全員、よく聞け！」

漆喰の壁へ反響し、その堂々たる声は天井まで届く。さすが、佐世保鎮守府の艦娘を束ねる重鎮。謎のゆるいエプロンを着けていても、一言で場の空気を引き締めた。

「例年通り、バレンタインデー準備のため、食堂を半日貸し切りとする許可が下りた。なお、今年は問宮と伊良湖にも準備へ協力してもらう。二人とも頼むぞ」

彼女が告げると、割烹着姿の艦娘二人がカウンター裏で会釈する。

たぶん、鎮守府の誰もお世話になってる艦娘って言ったら、給糧艦の間宮さんと伊良湖さんぐらいだろう。二人のおかげで、あたしらは美味しいご飯を食べられる。

……ん？ でも、チョコって自分達で作るんだよね？

（加古。お二人は事故防止の監督役ですよ）

青葉の解説。なるほど、そういう役回りなんだ。

（そっか。一応、火とか使うもんなあ）

（違いますよ。チョコの形をした劇物が製造されないよう監督するんです）

えっ？ 待って。どういうこと？

（一昨年でしたか。第三戦隊の司令官が意識不明で緊急搬送されたんですよ。長門さんが箆口令を敷いていましたが、どうも比叡さんのチョコが原因だったようで……）

（いや、緊急搬送って……）

（去年は、十七駆の司令官が激しい腹痛で緊急入院したとか。こちらの原因は、磯風さんの手作りチョコらしい、と。噂によれば、専用の解毒剤が開発されたそうですよ？）

どうやら、あたしの知らないところで悲しい事件が起きていたみたいだ。

その噂話が本当なら、安全対策は必要だと思う。まあ、ほぼ間違いない事実だから、間宮さん達を監督役にしたんだろうけど……解毒剤が必要なチョコってなに？

一通りの諸注意が終わると、長門は激励を込めて締め括る。

「年の一度の決戦だ。皆、悔いが残らないようやってくれ」

『了解っ!!』

「うむ。私からは以上だ。かかれッ！」

『邪魔だっ!!      どけええええっ!!』

殺伐とした雄叫びが上がる。和氣藹々とした雰囲気が一瞬で吹き飛んだ。

我先にとライバルを押しつけ、誰もがカウンターへ殺到する。最早、艦種の差なんて関係ない。カセットコンロや鍋、泡立て器を奪い合う熾烈な争いが起きていた。

シャッターを切るのに忙しい青葉を見る。

「……これも毎年？」

「調理器具に限りがありませんからね。そうそう、今年は材料も支給制になったんですよ。持ち込みは厳禁で、もし見つかったら没収されるそうです」

そりゃ二年連続で犠牲者が出てるんだしさ。そうなるでしょ普通は。

『あぁっ。ちよつとッ！ 私が先に手をかけてたのよ!？』

『早い者勝ちデース！ Oh、比叡？ 何を持ってるネー？』

『ハバネロです、お姉様！ 司令は辛い物がお好みですから隠し味にと!』

『浦風はボウルと泡立て器を！ ええ、そうです。私が鍋を確保します。磯風！ 貴女はコンロをつて……なんですか、その小瓶は？』

『ん、これか？ 司令の健康のため、私が調合した栄養剤だぞ』

『あの、比叡さん。磯風さんも。すみませんが、こちらに来ていただけますか？』

問宮さんに開始早々呼ばれる問題児達はさておき、古鷹はどこだろう？ さっきから揉みくちやにされる衣笠は目に入るけど、古鷹の姿がまったく見当たらない。

「……古鷹は？ さっきまでいたよね？」

「あそこですよ。ほら、カウンターの端のところ」

青葉の指先を追うと、小さな艦娘の傍にしゃがむ古鷹がいた。駆逐艦より頭一つ背の低い子だ。やや紫がかった毛先の長髪で、白いセーラー帽をかぶっている。

「海防艦だっけか？」

「松輪さんですよ。だいぶ前の方にいましたからねえ。後ろの勢いに負けて押し出されたんじゃないですか？ でも、一緒にいた択捉さんは……あ、来ましたね」

ちょうど視線の先で、挾掟が松輪へ駆け寄ったところだった。松輪と背格好こそ似ているものの、挾掟の髪は鮮やかな緋色で、長さも肩上ぐらいで切り揃えている。

ペコリと頭を下げた二人を、古鷹は小さく手を振って見送る。

——そっか。ちゃんと探しに来るのわかってたんだ。

きつと、人混みの中ではぐれる松輪を見たんだろう。だから、彼女の事を気遣って、挾掟が探しに来るのを一緒に待ってたんだ。一人じゃ心細いと思ったから。

……自分より他人を優先、か。古鷹らしいなあ。

でも、この状況でそれは不利となる。青葉曰く、貸し出し可能な調理器具には限りがあるらしい。とすれば、今から並んで道具一式を借りられるか微妙なところだ。

……しょうがない。ちょこつと手伝いますか。

「青葉。道具つて必ず借りなきゃダメ？ 持ち込んだじゃまずいわけ？」

「……そういえば、材料の持ち込みはアウトですが、調理器具の持ち込みはこれといって何も聞いてないですねえ。たぶん、大丈夫では？」

「じゃ、ちよつと力貸してくれない？」

「後にしてください。今、手が離せないのです」

「衣笠の録り溜めたドラマ。うっかり消したの誰だっけ？」

あたしの古鷹が可愛すぎてしょうがない！（試読サンプル）

ギギツ。青葉がこちらを向く。油の切れたブリキ人形みたいだ。

「ははっ。や、やだなあ。あれは機械の故障ですよ——で、何をすれば？」

「材料の確保。この様子じゃ材料も早い者勝ちだろうし、今のうちに一通り集めて欲しいんだよね。あたしは二人の使いそうな道具を持って来るからさ」

「仕方ないですね。でも、いいんですか？」

「ん？ なにが？」

「……古鷹さん。今年は司令官に本命を渡すんですよ？」

「うん。知ってる」

「だったら……」

人混みの後ろへ回る古鷹を見ながら苦笑する。

「古鷹の決めたことだから。なら、あたしは手伝うよ」

「……さすが、加古<sup>ヘタレ</sup>。相変わらず甲斐性なしですねえ」

「うっさいっ！ ほら、材料集め！ よろしく！」

物言いたげな青葉が、やれやれと頭を振って人混みに向かう。あたしもくるつと踵を返して大食堂の出入口を目指す。胸の重苦しさを押し出すように息を吐いた。

さっきは格好つけたけど、やっぱり嫌だな……。

あたしの古鷹が可愛すぎてしょうがない！（試読サンプル）

明日、古鷹は提督とケツコンする。

——あたしの古鷹は、あたしだけの古鷹じゃなくなる。

「ホント、どうしてこうなったのかなあ……」

それは一ヶ月前。あたしが提督の執務室で目撃した一件から始まった。

本編へと続く

『よろづ屋本舗』  
明暗異色のライトノベル販売サークル

KANTAI COLLECTION FANBOOK

**あたしの古鷹が可愛すぎてしょうがない！**

黒ねこ作  
表紙・挿絵／カロ

**6/23 砲雷撃戦で頒布予定！！**

『よろづ屋本舗』のホームページで詳細等はお確かめください！

『よろづ屋本舗』



<http://yorodukatudousi.dou-jin.com>

本やサンプルの感想、ご意見等も歓迎です！  
ホームページや著者の Twitter 等に送っていただければ幸いです！

サークル代表：黒ねこ作（@gretelproject）

あたしの古鷹が可愛すぎてしょうがない！ （試読サンプル）

KANTAI COLLECTION FANBOOK  
あたしの古鷹が可愛すぎてしょうがない！

発行者：よろづ屋本舗

HP：<http://yorodukatudousi.dou-jin.com>

Eメール：[yoroduyahonpo@gmail.com](mailto:yoroduyahonpo@gmail.com)

著者：黒ねこ作（@gretelproject）

Twitter：<https://twitter.com/gretelproject>

イラスト：カロ（@karoro3rd）

装丁デザイン：船木渡（船木同人ワークス）

編集：黒ねこ作（@gretelproject）

これはサンプルです。完全版ではありません。

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部  
または全部を無断で複写(コピー)することを禁止します。

また、この作品はフィクションであり、実在する個人、団体  
とは一切関係ありません。